特定研究「神社祭祀と村落祭祀に関する調査研究」の経緯

福原敏男

国立歴史民俗博物館の特定研究「神社祭祀と村落祭祀に関する調査研究」は一九九四・一九九五年度に実施されたもので、実施後研究報告書の刊行が大幅に遅延した責任はひとえに、研究代表兼事務担当者の福原敏男（当時、国立歴史民俗博物館民俗研究部助手）に帰せられるものである。

執筆してくださった共同研究員や調査にご協力くださった地元の方々に対して、深くお詫び申し上げます。

1　目　的

そもそも本特定研究は「近畿の村落社会と民衆」という、壮大な研究課題名称のもと発足した。その一翼（研究課題B）が本特定研究であり、もう一翼が新井勝紘氏（当時、国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）が研究代表者の「近代社会における差別の史的研究」（研究課題A）であった。この二テーマを包摂した研究課題名称が前述のものである。

近畿地方をフィールドとして、近世～近代～現代の社会にまでかかわる「一つの村や町という共同体の基盤を超えた広域・合同祭祀」と、「村落社会における民衆の差別構造と差別意識」の二側面から、近畿地方における社会と民衆の関係を史的に考察することを目的とし、その調査・分析を通して、近畿地方の村や町の地域的特徴や民衆意識の把握につとめた（『国立歴史民俗博物館研究年報四　一九九五年版』）。

上記が特定研究の包括的研究目的であったが、実質的には両特定研究とも、それぞれ問題を先鋭化・特化した。フィールドのみでなく、問題意識も絞り込んで、若手・中堅の研究者を中心に共同研究が実施された。

特定研究という共同研究の実施においては、著名な研究者が総花的に談論風発するよりも、ある限定された課題を短期間に追究したほうが成果があがるのではないかという見込みもあった。

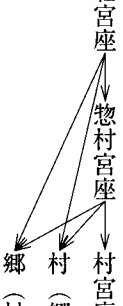
さて、神社祭祀研究は、皇国史観というイデオロギーの桎梏から解き放たれた戦後、特に、一九六〇、七〇年代に飛躍的に進展した。

従来、村落や都市の祭祀組織の研究は、歴史学・民俗学・社会学・人類学・宗教学などを中心に進められてきた。近畿地方の事例研究としては、個人研究では肥後和男氏の『近江に於ける宮座の研究』（臨川書店）や『宮座の研究』（弘文堂）という成果などがあり、共同研究としては社会伝承研究会による『近江村落社会の研究』（滋賀県野洲郡御上神社の祭祀組織の研究）などがある。

しかし、この十年ほどは新たな視点や方法での研究の展開はみられなかった。その原因として、文献史料が豊富なフィールドでは伝承が希薄で、伝承が濃厚なところでは文献史料が少ないという研究対象の問題もあった。しかし、結局は従来の問題設定や切り口によるものであり、過

去の踏襲では今後の斬新的な展望は望めないという認識にいたった。

例えば、萩原龍夫氏が提出した宮座の変遷史的枠組（『中世祭祀組織の研究』）



は定説となっているが、従来の宮座研究の問題意識からは、この枠組みは既定・前提であり、これ自体を再検討することは不可能であろう。

本特定研究は、新たなる問題設定を模索するための共同研究である。

本特定研究では近畿地方を主なフィールドにしている研究者が参加して、近世村や町共同体を超えた祭祀範囲をもつ神社祭祀や仏教行事を主な研究対象に、新たな祭祀研究のための問題設定を模索するための研究である。

本研究においては、村落における広域祭祀を荘郷祭祀、都市における惣鎮守祭祀を惣町祭礼と、新たな概念を設定し、二年間の四回にわたる共同研究に共通の問題意識を持ち、広範な議論が行われた。

2　研究会経過

第一回研究会　一九九四年七月二、三日　国立歴史民俗博物館

福原敏男　本特定研究の目的と課題

小栗栖健治　中世宮座論

脊古真哉　湖北における広域祭祀

第二回研究会　一九九五年三月十八～二十日　滋賀県八日市市

中島誠一　近江のオコナイにみる牛玉信仰の諸相

和田光生　近江のオコナイ論

現地祭礼見学　八日市市河桁御河辺神社の郷祭り

第三回研究会　一九九五年十二月二、三日　三重県四日市市立博物館

上野和男　御上神社の宮座組織とその儀礼

福原敏男　トミ（トビ）をめぐる祭祀の問題

東條寛　祭礼・山車・風流

第四回研究会　一九九六年三月二、三日　国立歴史民俗博物館

脊古真哉　滋賀県木之本町杉野のオコナイについて

黒田龍二　滋賀県湖北地方の「オコナイ堂」について

中島誠一　オコナイにみる変遷の構造―滋賀県湖北地方と島根半島・大分県国東半島の事例―

翌年、京都市において共同研究員による私的な研究会が実施されたが、省略した。

3　成果

ムラ（近世の行政村―現在の大字）という空間を主たる伝承母体として主たる研究が蓄積されてきた日本民俗学を再検討するためには、この空間自体が問われねばならない、という共通認識のもとに共同研究が実施された。

研究会では実証的な調査報告に基づいた研究成果をもとに討論され、歴史学・民俗学・人類学・建築史の諸学問領域・方法論を超えた枠組みの組替えが試行的に提示された。

特に、村落レベルのオコナイという正月行事と、広域祭祀組織を有する地方の拠点霊山の仏教法会との関係（伝播の問題）、オコナイが修せられる建築物の分布の問題（滋賀県でいうと湖北の宮オコナイ、湖東や湖南の寺オコナイという分布定説の問題）など、従来の研究が捨象してきた問題について、議論が交わされた。

複数地区の合同祭である荘郷祭祀とそれの下部単位である一村落の祭祀との関係、惣町祭礼と一町祭礼との関係についても、事例研究発表が積み重ねられた。

都市祭礼に関しても、町共同体を超えた城下町規模の惣町自体を祭祀範囲にする都市祭礼への取り組みが、文化人類学・社会学・宗教学の研究者によって、京都・長崎・川越・秩父・大阪などをフィールドとして進められてきた。その研究史が整理されたが、従来の研究においては近世史・近代史などの歴史学者との共同研究が少なく、一様に地域統合への志向装置という結論が誘発されやすいという指摘もなされた。

共同研究会の総括としては、荘郷祭祀の祭祀圏が近世村成立(村切り)以前の荘園領域や郡・郷などの支配領域の問題を反映している事例、それと密接に関わる宗教的拠点(地方霊山)の問題といった「上からの強制力」、水郷や山郷といった水利組織(用水利用組織)や山林利用(共有林・入会地)といった「在地生活の必要性」が主たる課題であろうと討論が交わされた。

その広域の範囲・設定の経緯に関しては、ケースバイケースであり、統一的な作業仮説は今後に期せられた。

4　研究組織(所属は一九九四・九五年当時)

宇野日出生　京都市歴史資料館
大塚活美　京都府京都文化博物館
小栗栖健治　兵庫県立歴史博物館
久下隆史　兵庫県教育委員会
黒田龍二　神戸大学工学部
脊古真哉　学識経験者
東條　寛　四日市市立博物館
中島誠一　長浜市立長浜城歴史博物館
和田光生　大津市歴史博物館
上野和男　国立歴史民俗博物館民俗研究部
小島道裕　国立歴史民俗博物館歴史研究部
橋本裕之　国立歴史民俗博物館民俗研究部
福原敏男　国立歴史民俗博物館民俗研究部(研究代表・事務担当者)

(日本女子大学人間社会学部、元国立歴史民俗博物館民俗研究部)